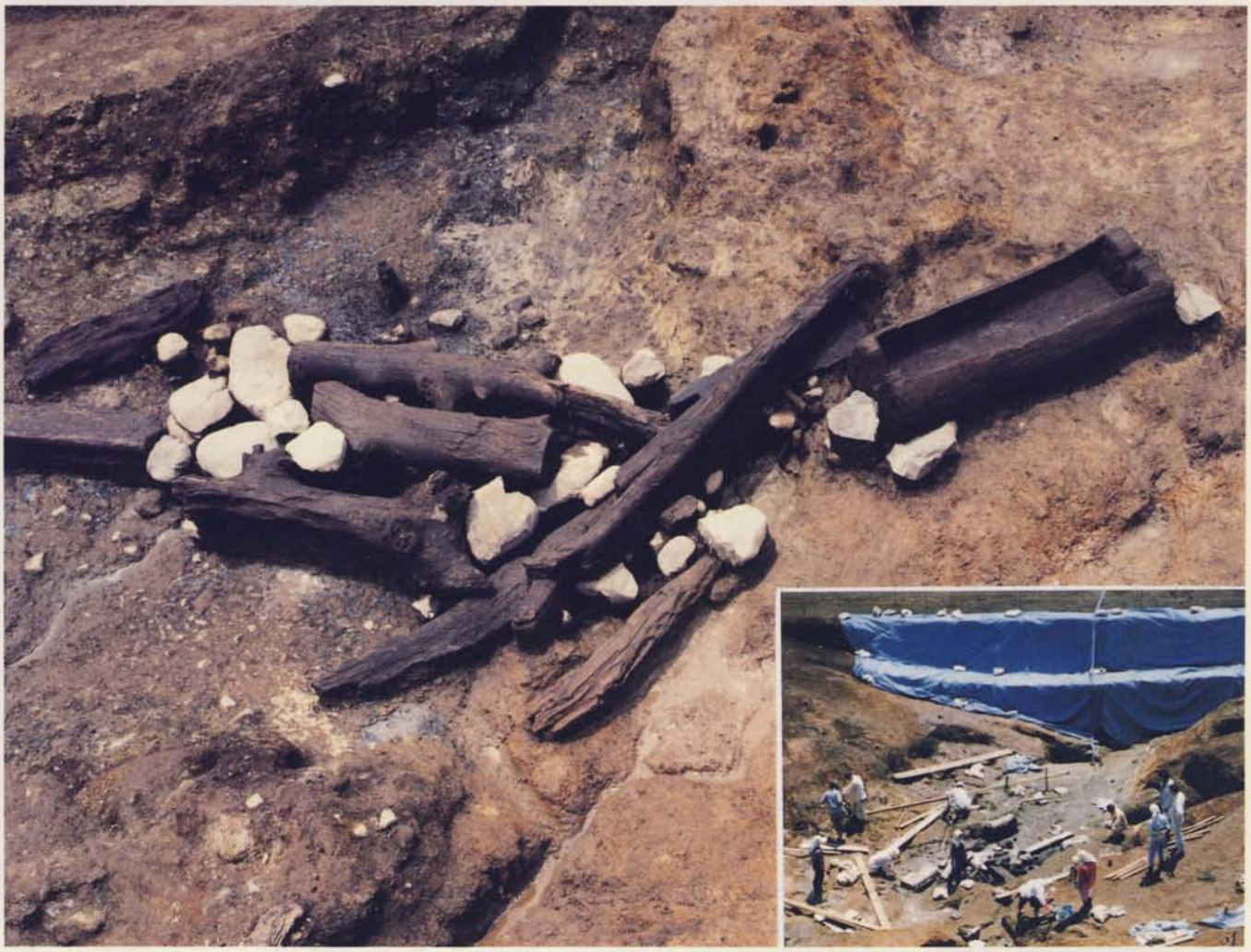
たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No. 41　平成9年10月20日

発行
(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1—14—2
☎ 0423-73-5296
平成9年10月20日



古代の水場跡　右が上流側で、上方に木槽が設置されている。
右下は水場跡の発見された谷と、調査の様子。

古代の水場

主任調査研究員　川島　雅人

最近はあまり目にすることがなくなりましたが、かつて町や村の川辺や湧水地は、地域の人びとの暮らしに利用され、生活の拠り所にもなっていました。

そうした古代の水場の跡が、最近、町田市小山にあるNo.960遺跡から発見されました。この遺構の周辺からは、10世紀を中心とする22軒の竪穴住居跡も調査されており、水場を取り巻く多摩丘陵の古代集落として注目されます。

水場は、小さな河道の右岸をコの字状に掘削して作られていました。流れを堰き止めるように、河原石を基礎にして、丸太と板材をL字形に組み合わせ、それを杭と礫で固定していました。上流側には、太い丸太を刳り貫いて作られた、長さ1.1mもの木槽が設置されていましたが、水溜めとして使われたようです。

この水場には、当時に使われたいろいろの物が残されていました。須恵器や土師器、緑釉・灰釉陶器、瓦、いくつかの木槽と木皿・曲物といった道具類をはじめ、モモ・ヒョウタン・ドングリ類や昆虫の遺骸、はてはイノシシの牙も発見されました。

この水場を通して、当時の食生活や周辺の環境を知ることもでき、古代の人びとの息づかいが聞こえてくるようです。

遺跡だより㊾

三鷹市島屋敷遺跡

島屋敷遺跡の調査状況は本紙39号でお知らせしましたが、この度、約二万七千年前の「局部磨製石斧」が出土しましたので報告します。

この石器が出土したのは、仙川に沿った弧状の高まりで、南西に向かう緩斜面です。おそらくⅨ層上部に含まれていたと考えられますが、この辺りは豊富な水量で知られた「丸池」に近いために地下水位が高く、水つきによる酸化鉄層が何枚も帯状に見られます。このために、出土した層位は特定しにくいものでした。

石器の大きさは、長さ135㎜・幅66㎜・厚さ38㎜・重さ299ｇを測り、関東地方から出土しているこの類の局部磨製石斧としては、やや大形に属します。表面に礫皮を残す大形剥片を素材に、両側縁を細かく加工して形を整えています。平面形は、刃部が最大幅となり、基部に向かって狭まる「撥形」です。

その局部磨製の刃部ですが、刃角が60～70度の両刃で、表裏両面の5～3㎜幅というごく狭い範囲だけが顕著に研磨されています。

この石器の石質は、御殿峠礫層に由来する「中粒凝灰岩」と考えられ、多摩ニュータウンNo.72遺跡で見つかった石器群との関連も窺えます。

これまでに都内から出土した局部磨製石斧は30本余りになりますが、その多くはⅩ層からⅨ層下部に集中しています。そしてこの時期の局部磨製石斧は、全体の形が「楕円形」で、体部の中央まで研磨されるのが多いようです。本例は、形態的にも「撥形」で、しかも研磨部分が帯状に狭い特徴から、今までの出土例とはかなり様相が異なります。

立川ローム層の最下底部に出現して、最終氷河期の最寒冷期に向かうにつれて少なくなる局部磨製石斧の在り方を考える上で、本石器は大きな手がかりを与えてくれそうです。

（五十嵐　彰）

局部磨製石斧の出土位置

平成九年度の海外研修

第四回目の全国埋蔵文化財法人連絡協議会・関東ブロックの海外研修が、今年も九月八日から十三日までの六日間、中華人民共和国の北京市と西安市を中心に行われました。

参加者は、茨城・栃木・千葉・埼玉の4県を含む16名で、当センターからは佐藤調査研究部長、中村庶務係長、圓谷調査センター係長、竹尾副主任調査研究員が参加しました。

中国社会科学院考古研究所、中国社会科学院西安考古研究室を公式訪問して、友好的な雰囲気のなかで意見を交換しましたが、特に、現在の中国考古学の成果について有意義な回答を得ることができました。

このほか、周口店遺址博物館・八達嶺長城・秦始皇兵馬俑博物館・陝西省歴史博物館・故宮博物館等を見学し、「悠久の国　アジアの隣国を訪ねて」の研修目的を達成することができました。

周口店の遺跡にて

最大規模の横穴墓を発見

新聞やテレビでも大きく取り上げられましたが、このほど町田市小山にあるNo.313遺跡から、石積をもつ大規模な横穴墓が発見されました。場所は、本紙の表紙を飾った水場遺構のすぐ近く、調査の終了まじかに、造成で土盛りされていた下から現れたものです。

十月十七・十八日に、遺跡の現地説明会を催しましたところ、大勢の見学者が訪れて賑わいました。この模様は次号でお知らせします。

文化財講座 〈31〉

大江戸掘りもの帖 ～其八～

大名屋敷と災害

地震・火事・火山噴火・洪水などの災害は、今までに幾度となく人々の生活に被害を与えてきました。遺跡の中からもそうした痕跡が数多く見つかっていますが、例えば、火山の噴火で埋没してしまったイタリアのポンペイ遺跡などは、火山災害跡の典型として知られています。

現在、港区新橋で発掘中の汐留遺跡でも、江戸時代における災害の痕跡が見つかっています。一つは地震の跡であり、もう一つは火事の跡です。

地震の跡は、龍野藩の長屋部分と仙台藩の御殿『表向』部分で発見されており、両者共に、元禄十六年の大地震により発生したと考えられる液状化跡です。龍野藩邸で見つかっている液状化跡は、平面的には幅1～2㎝程の砂脈が20㎝四方に広がっており、幅の広い所では20～30㎝というものです（写真）。

また、一部では、砂の噴き上がりに伴って、地盤が競り上がっている部分もあり、付近の建物にも相当の被害があったと考えられます。火事の跡としては、焼けて赤く変質した地表面などが確認されますが、汐留遺跡に位置している大名屋敷は、記録に残っているだけでも、十数回も火事に遭っており、その痕跡も数多く認められます。

液状化跡（白い部分が砂脈）

それでは、これらの痕跡からいったい何が分かるのでしょうか。一つ代表的なものを上げるとすると、遺跡の年代を限定するのに役立つことでしょう。大名屋敷を調査すると、石組溝・ゴミ穴・上水桶など多種多様な遺構がみつかりますが、これらの機能していた時期は、通例ですとそこから出土した遺物から判断するしかありません。ただし、遺物からわかる年代幅は比較的広いので、遺構が機能していた時期を限定することは困難です。そこで役立つのが、地震や火事の跡というわけです。

これらの多くは文献等により発生年代が特定できるので、遺構との関わり合いによっては、これを一つの指標として、遺物から分かる年代幅をさらに限定することが可能になってきます。

生活している人にとって、出来れば災害には遭いたくはないものです。しかし、遺跡のなかで発見される災害の跡は、考古学上、貴重な資料を提供してくれるのです。

（西澤　明）

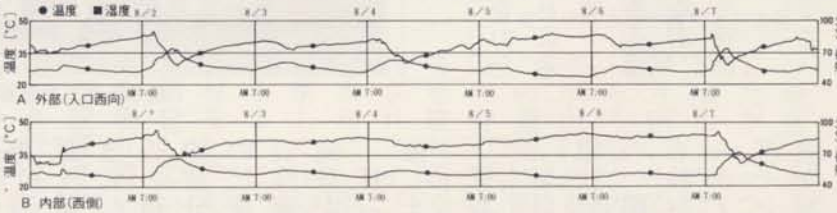
保存科学室こぼれ話 (五)

遺跡庭園「縄文の村」には復元家屋が三棟建っています。

この家屋で週に四日、順に、縄文時代さながらに焚火を行っています。この作業は平成二年から多摩市シルバー人材センターに委託していますが、真夏ともなると汗だくの苦行を強いているわけです。

焚火をする目的というのは見学者に見てもらい、縄文人の雰囲気に浸ってもらえたらという狙いですが、それだけではなく、もっと本質的な問題を抱えているのです。

復元家屋の中は、土間からの湿気により一年を通して湿度が高く、しかも太陽熱の弱い冬には、地熱により外よりも暖かなため、虫が棲息したり、黴（カビ）が繁殖しやすい環境を作ります。そこで、復元家屋の柱や茅葺き屋根を害虫や黴から防除するのに、焚火の熱と煙で燻蒸するのが効果的といえます。



平成四年からは、日に4回、復元家屋の入り口部（A＝外気）、内部右側（B）、内部中央奥の三箇所で温度の変化を測定しています。

図は、八月一日から八日までのA棟（敷石住居）の変化を、小型温湿度計で十分間隔に測定した温湿度の記録です。

焚火をしない平常日は、平均して温度が27度、湿度が95％です。それが焚火をした二日と七日では、作業を開始した午前10時から温・湿度が変化し始めて、作業を終了した午後3時30分には、温度が36度、湿度が55％になりました。

作業を終えると、その後、少しずつ元の状況に復して行き、午前7時になると平常に戻りました。

（門倉　武夫）

文化財講演会

平成九年度の文化財講演会は、展示テーマ「丘陵における文化の醸成」に因み、文化の交流と形成をテーマにした企画をたて、各時代の様相を概観することにしました。

第一回は、七月五日（土）に、当センターの上條朝宏主任調査研究員による、「土器作り粘土の採掘とその行方」の講演と、映画「多摩丘陵」を上映しました。猛暑の中、74名の参加がありました。

第二回は、八月二日（土）に、当センターの鶴間正昭副主任調査研究員による、「古代の丘陵開発」の講演と、映画「古代史発掘」を上映しました。122名もの参加がありました。

第三回は、十月四日（土）に、東京都立大学助教授山田昌久氏による、「東日本の初期稲作」の講演と、映画「佐渡の車田植」を上映しました。参加者から熱心な質問が引きも切らず、稔り多い講演会でした。参加者は98名を数えました。

山田昌久氏の講演

縄文土器作り教室

このところ、毎年、参加希望が募る一方となりました人気行事「土器作り教室」が、八月二十一・二十二日および九月十三日の三日間にわたり開催されました。二日間を土器作りに、野焼きは三週間の乾燥を経て遺跡庭園でという段取りでした。

ところが野焼き当日は夜来の雨が残るという、決行が危ぶまれる天候。途中に降雨があって、模様眺めなどもあり、終了が四時になりました。それだけに参加者の喜びはひとしおといったところでしたが、神経をすり減らした長い一日でした。

安全標語　決まる

今年度の安全標語の第一席には、宇佐美義春氏が選ばれました。

整理整頓きちんとすれば
能率向上　危険は減少

焼き上がった土器を抱えて記念撮影

分室ネットワーク

赤羽北分室　袋低地遺跡の調査のため分室が設立され、八月十二日に着手しました。小林係長と山口慶一・飯塚武司副主任調査研究員・西山博章調査研究員が従事します。なお、縄文時代中期後半の地点貝塚や後期の流路が検出されています。

南大沢整理所　暑い暑いと思っていたらもう秋です。そろそろ遺物の写真撮影が話題に上がります。

日の出分室　図版作成も本格化し、一丸となって最終段階に向かっている今日この頃です。

秋川分室　釣り人で賑わった秋川もいまはひっそりして、事務所の窓からは、冬籠りを前に忙しく餌をあさるリスの姿が見られます。

新川分室　現場での作業は九月五日ですべて終了。今年度中に報告書を作成すべく、鋭意、整理作業中です。

市ヶ谷分室　調査は東御殿の玄関付近を終了し、表門付近に移りました。また、能舞台に接する表御座之間付近の遺構検出作業を進めています。

汐留分室　龍野藩・仙台藩・会津藩の三屋敷を同時に調査しています。会津藩敷地で十七世紀後半の埋立て施設が検出されています。十二月十三日（土）の午後に現地説明会を開催しますので、いらしてください。

インターネット　ホームページ

東京都教育文化財団では、高度情報社会に対応すべく、広報普及活動の一環としてインターネットの導入を検討してきましたが、この十月からホームページを開設いたしました。当センターの事業概要や調査の進捗、催物案内などが紹介されていますので、どうぞご利用ください。

メールアドレスは、

『http://www.posi.or.jp』